


 書評

市川忠彦 著

## 誤りやすい異常脳波 (第3版)

井上令一

## 臨床脳波判読における座右の書

昨年(2004年), 11月17~19日の3日間, 第34回日本臨床神経生理学会学術大会が, 杏林大学医学部精神神経科の古賀良彦教授を会長として東京の台場で開かれた。

古賀学会会長は, 学会のテーマを“Back to Clinical Neurophysiology”とされ, そのご挨拶の中で「…むしろ若い先生方に神経生理学の楽しさ, 醍醐味といったものを知っていただき, よかったら一緒に勉強しませんか, という気持ちの現れとご理解いただきたい。“脳波なんて3日でわかる”というシンポジウムはそのきっかけ作りというつもりで設けたものである。もちろん, ベテランの先生方にももう一度楽しさを味わっていただくことを期待している…」と述べられたが, この学会は1,300余人の人達が集まるという盛況であった。シンポジウム“脳波なんて3日でわかる”は, 基礎編, 臨床編, 応用編と3日に分けられて開催された。評者も松浦雅人教授と臨床編の座長を務めさせていただいたが, 熱気溢れる会場であった。古賀会長も憂えておられたように, 近年, 臨床医は中枢神経系の検査もCT, MRI, PET, SPECTなどの目覚ましい発展に目を奪われ, 残念なことに臨床脳波はともすれば片隅に追いやられている観がある。

非侵襲的で脳機能の状態をリアルタイムで伝えてくれる臨床脳波は, 他の検査と比べても勝るとも劣らぬ情報を提供してくれるのである。

著者である市川忠彦先生は, 若き日にレンノ

ックス・ガストー症候群に名を残された, てんかん学の泰斗であるフランスのガストー教授の許に学ばれ, l'Attestation d'Études d'EEG Cliniqueを取得されている。本書は1989年6月15日に初版が出され今回は第3版であるが, さらに「誤りやすい特殊脳波」が書き加えられ国際臨床神経生理学会用語集の改訂に伴う解説が行われている, まさに臨床脳波を判読する際の座右の書である。

本書は疾患中心ではなく波形を中心とした教科書であるが, 提示されている脳波は, 実に綺麗で説得力がある。波形の示す性状と示唆される病変を綴りながら, 著者の「…定型的な異常波形の陰で, これまでともすればかえりみられなかった紛らわしい波形に光をあてながら, それぞれの異常波形がもつ誤られやすい側面を浮き彫りにしてみた…」(初版・序)という脈絡が生き生きと読者に伝わり, 推理小説を読むような楽しさがある。これは類書に例を見ない本書の特徴である。脳波はてんかんや外傷性その他の脳器質性疾患の診断や経過に有用な情報を提供するが, 情動障害や発達障害などにみられる特殊な波形もある。ぜひ, 本書を一読され, 臨床脳波がいかに面白く, 示唆に富むものであるかを, 本書を改めて通読しつつ読者にも検証して頂きたいと心から願うものである。

((財)順天堂精神医学研究所所長)

●B5 296頁 2005 定価5,775円(本体5,500円+税) 医学書院